
手段は目的とは異なるということ

大 山 篤

(東京医科歯科大学 歯学部附属病院 総合診療科)

深井先生

平素より歯科医療行動科学講座の非常勤講師として本学でご講演いただき、大変お世話になっております。先生のお話は臨床という「目的」がはっきりと聴く者に伝わるため、これから歯科医療に携わっていこうとする学生の、学習に対するモチベーションが向上してくるのがわかります。私も拝聴したかったのですが、ちょうど学内のOSCE (Objective Structured Clinical Examination ; 客観的臨床能力試験) 医療面接の評価者をしておりました関係で、失礼させていただきました。次の機会には是非、拝聴させていただきたいと楽しみにしております。

さて、そのOSCEについてですが、最近、少々気になっていることがあります。各大学で行われている臨床教育で習得した知識、技能、態度を確認する評価方法の一つにすぎないOSCEが、いつの間にか目的となっている場合があることです。歯科臨床教育においては、歯科治療を行うために多くの学習目標があり、それに沿って教育が行われます。OSCEは様々な学習目標ができていのかどうか評価するため、学習目標の一部をとりだして到達度をみる「手段」にすぎません。それにもかかわらず、臨床教育の一部を抜き出して評価しているOSCE自体を学習目標にしてしまうと、臨床教育の学習目標が全体として達成されない可能性が出てきます。多くの学習項目の中からOSCEに出るところだけ、山をかけて勉強するように指導しているようなものだからです。このように、実際の臨床で求められる学習目標が一義的な目的であることを見失ってしまうと、学習する内容は全く異なってしまいます。

また、コミュニケーション教育でも同様の傾向が見られます。たとえばOSCEにも取り入れられ

ている医療面接ですが、現在の歯学系の医療面接教育は医学系の医療面接技法を追従しています。そのため、歯科で必要とされるコミュニケーション技法に関する議論がまだ不十分なところがあります。医療面接にも各疾患で共通して使える技法と疾患特異的な技法があり、内科や精神科の医療面接と歯科の医療面接には、異なる部分があって然るべきです。歯科では他の疾患と異なり、患者さんの主訴を解消するためには主訴をただ聴くだけでなく、外科処置や患者さんの審美的な希望などを治療に取り入れることが必要となります。歯科治療を行うことを目的とすれば、患者さんから情報収集を行ったり、心理的面のケアをはかったり、患者教育を行ったり、信頼関係を構築するといった医療面接の機能は、目的を達成するための手段です。歯科における患者のナラティブのありかたも、単に病苦を追求するのではなく、治療が目的であることを見失わないようにすることが要求されます。

手段と目的はしっかり分けて考える必要があります。手段を目的としてしまうと方向性が異なることから、実際に達成しなければならない目標を到達できなくなります。目的と手段を見誤らないことが、これからの歯学教育に強く求められていると思います。今後とも深井先生には行動科学をはじめ、いろいろとご指導いただければ幸いです。

【著者連絡先】

〒113-8549 東京都文京区湯島1-5-45

東京医科歯科大学 歯学部附属病院 総合診療科

大山 篤

TEL&FAX : 03-5803-5765

E-mail : VYI04146@nifty.ne.jp